



いなべ市梅林公園にて 3/12

教会月報

あつた

金光教熱田教会

No.724 2019. 4

メール attakai@nifty.com

<http://attakai.life.coocan.jp/>

立教百六十年

教祖様にほれなおす年

教会長

先日、ある金光家の方から、教祖様の青年時代お話を耳にした。

それは教祖様十八才のときの出来事についてのことだ。源七改め文治君は十二才で川手家に養子に入った。川手家が養子を迎えたのは、当然もう実子が望めないと考えたからである。ところが、養子に入ってから六年後、養父養母の間にあきらめていた子どもができたのだ。養父六十一才、養母四十一才のことで、現代の長寿健康社会でも異例と言っている。鶴太郎と命名された実子の誕生は、それはそれは喜ばれ、格別に可愛がられて育てられたに違いない。

養父母としては、実の子に家の後を継がせたいに決まっている。文治君の立場は、家の後継者として迎えられた立場から一変して、ナンバー2となったのである。そのときの文治君の心や如何に。私はこのときの文治君の気持ちを想像すると、痛ましくてならなかった。

ところが、先日お聞きしたお話は、ここに光を当ててくれた。

「教祖様は義理の弟鶴太郎の手を繋ぐなどして、大変可愛がっておられたと聞いている」というのである。これはおそらくは金光家だけに伝わってきた話ではないかと思われる。

私はこの話をお聞きして、教祖様にほれなおした気がした。普通なら「自分の将来はどうなるだろう。せつかく一生懸命この家のためにと、思つて勉強もし、農業も学び、親孝行にも勤めてきたのに……」と考えるだろう。しかしこのわずかな伝承ではあるが、そんな様子はまったく伺えない。それどころか義弟の誕生を喜び、「この子を支えてこの家のために一層励み尽くしていこう」という決意のようなものさえ感じられるのだ。

鶴太郎は可哀想にも六才で亡くなってしまった。教祖様二十三才の年である。養父母と悲しみを共にしたことだろう。

○ この道の信心を進めていくためには、教祖様にほれるのが第一だ。私はこれまで、教祖様の生きられ方にほれてきた。「あいよかけよを生んだバランス感覚」「悪者を決して作らない生きられ方」「負けるが徳」といった信心に。そこに今回お聞きした「様子」「素直に喜び与えられたことに生きる」が加えられた。

